

「聞いて御覽よ音がする」

こゝまで始めの動作を續けます。

「ピチ／＼パシヤ／＼音がする」

頭をかたむけ、左又は右の耳の側で拍手しながら各自の廻りを一廻り致します。

可愛い兩の音が聞えませう。

「ほーらお池に降つてゐる」

二呼間で踵を舉げると共に兩手を伸ばして前より上に舉げ、次の二呼間で兩手を前より下して後にひくと共に、膝を全屈します。従つてこの動作を二回繰返すことになりす。

「金魚はどうしてゐるかしら」

全生お互に、兩手を隣生の肩にのせ、圓心に進み、最後の小節「ら」の時に、上體を前方にかゞめて、池の金魚を覗く様な態勢を作ります。

この時は、皆揃つて、そつと見に參りませう。大きな音をたてると金魚達が驚くでせうから。

「雨が／＼降つてゐる、聞いて御覽よ音がする」一節と同じ動作。

「ほつ／＼／＼音がする」

右手を握つて左掌をたゞきながら（一節と同様耳の側で）各自の廻りを一廻り。

「ほーら八ッ手に降つてゐる」

一節の「ほーらお池に降つてゐる」と同動作。

「晴れたら葉つばが光るだらう」

左(右)の方を向き、兩掌を開いて、最初二呼間、顔前でキラ／＼動かし、次の二呼間兩手を下して正面を向きます。次に、反對の方向に同様動作をして最後に正面を向きます。八ッ手の葉つばの様にお手々を開き、葉つばがキラ／＼光る時皆さんのお顔もニコ／＼輝いてゐるでせう。

「幼兒體操」(ハトボツポの體操)

皆さん揃つて、レコードやピアノに合せ、各部の動作は、ものまね とか あなたのまね で、特に練習する事が出来ませうが、自然な大きな動作でいたし度いと思ひます。

観 察

軍艦(繪又は寫眞による)

清 水 光 子

繪や寫眞によつて觀察をさせてよいとするのは觀察本來の意義からは願はしくないことが言ふまでもなく、止むを得ない場合の他は實物を觀、それで遊ぶことにし度い。これは止むを得ない場合の一つだと言つてもよく、又そこに別の意味も加つて來るが實物の場合とは取扱ひにも違つた注意があらう。まづ正確な、新しい寫眞や繪であることが勿論望ましい。大東亞戦争が始つてからといふもの軍艦について皆の關心が昂つてゐるからこの海軍記念日には特に氣をつけた取扱ひなし度いものである。出來れば黒板や壁にはつてみんんで見られるやうな繪か寫眞を用意して子ども達と一しよにはり乍らみて話合ふ。大人の及ばない軍艦通があつ

て驚かされることもあらう。保母が殊更に知らない顔をするのもなく、精通した智識を話してきかせることは要らないことであるけれど、海國民として常識的な、軍艦の種類とか、性能、大體の形、敵國軍艦と外見上著しい相違とかは知つてゐて、事だと思ふ、子どもとの話合ひの中にそんな様なことを、我國軍艦のめざましい活動とどうしてあんなにつよいかを話してきかせる中に知らせるやうにする。斯うした繪や寫眞は一日二日でなく、二週間位はいつも目につくやうに見せて置く。此頃のやうに新聞にある戦争中の寫眞もその時々心して切抜いてはつて見せるのは又言ふ迄もない。

衣更へ、季節について

このころは以前程衣更への嚴密さはないが、こんなに暑くなつた、木の葉がすつかりしげつた、といふやうな季節に對する關心を呼ぶいとぐちに、まづ身近なきものに注意する。誰さんは今日から半袖になつたのね、とか、幼稚園の前のお巡査さんの洋服が白くなつて、とか先生は今日から単衣よ(單衣といふ意味もみせて話す)とかいふことから、みんなが幼稚園に入つた頃は木の芽や草の芽が出たばかりだつたのに、みんなの植えた、蒔いた種子からこんなに大きくなつたし、木の葉はみんな繁つたし、日向ぼつこしたのが、日陰がよくなるやうに暑くなつたし、といふやうなことを話して、これからさん／＼暑い夏の日がつゞいて次に、秋に、冬に、又春に、といふ季節の移りかはりを話す。そして今盛に戦をしてゐる方面の氣候のことを一しよに話して、兵隊さんの御苦

勞を感謝し乍らしのぶやうにし度い。大きい組にもなれば日の長さの事を話すが小さい組ではまづ／＼身近なことから直接目で見、感じさせ乍ら話す程度にする。

かたつむり

子どもの好きなかたつむりが出る頃である。お庭の隅から誰かがみつけて来たとなると欲しい人が澤山ある。みつげに行く、先生も一しよに、誰さんはどこでみつけたの、こゝら邊にゐるかしら、ゐない、こゝには、こゝにゐた。又ゐた。ぢやこゝにもゐるでせうか、澤山ゐた、といふやうに見つけて箱に入れて二三日か或は長く飼つてみても面白い。所謂角を出してはひまはるのをみたり、ぬれた所を歩く、前にあとのある所をあるくのなみたり、こげをなめでゆくあとをみたりする。

雨

そろ／＼、梅雨になる。今日も、昨日も雨、外へ出られないといふ日に梅雨の話が出る、どんなに雨ふりの日が多いかすつと見てみませうと毎日のお天氣を赤丸青丸白丸で黒板の隅にかくなりはるなりしてみるのもよい。窓から雨が降つてゐるのを眺める。どうして降るのと聞く子ども、どうしてでせうねと言ひ乍ら空を仰ぐ、どこから降るのと又きく、どこからかしら、雲からよと返す子ども、今日の雨はザーザー雨ね、しよば／＼雨ね、又霧雨ね、葉っぱに當つてはねかへつてゐる、お庭がお池のやうになつて雨のおちてきた所が丸くなる、こんな話をし乍ら眺めるのでよい。

時計

六月十日が時の記念日なのでこゝに時計が出て来たのであるけれど時の記念日のことは年少組では話さないでもよいかと思ふ、針のうごくやうにした時計といふより文字板に針をつけたのをお室に置いて針をうごかして今何時といつて實際の時計と合せてみせたり、幼稚園が始まる時刻、おべんどうの時刻、お八つ、お歸りの時刻を示してみせたりする。この作つた時計はおまゝこの家の時計に自由に使はせるやうにする。

野菜

子ども達と植えた野菜が何に依らず收穫したらそれは本當にうれしい事で、さつそくお盆にのせて家庭でなりお初物として神棚、佛壇に供へるといふ所であるが、寫生をしたり茄子や胡瓜のやうなものなり粘土でつくる。二十日大根や人蔘などならきれいな紙、切紙が楽しめる。そのままやえんどうは子ども達にわけてもよいであらう。若し幼稚園で出来たお野菜がない時は時々季節々々のものを用意して手技の材料にして親しませるやうにし度い。

談話

安村 ぶさ

六月といへば幼稚園生活にも幾分慣れた頃で、團體行動にも素直に入つて行ける心構へが、淡いながらも出来かけた時であります。それと同時に、各自の持ち前を發揮して、他人の迷惑になる

様な元氣過ぎる子ども二人三人現れ始めます。そんな時に子ども達の氣持を和げる爲に、靜かにお話を聴かせるといふのは誠に好ましい事であります。又此の頃はうつつたうしい梅雨の時期ですが、平常日光を惜しんで戸外で遊ぶ幼稚園では、却つて此の雨を幸ひとして靜かにお話をしたいものであります。

此の月、保育案に豫定されて居ますのは、西瓜と鼠、田原藤太、梅雨の話、牛若丸、馬の頭、赤の王様、七匹の小山羊、三匹の子犬のはなしであります。此の一ヶ月には古今、東西のお話が選ばれてあり、變化があつて大變面白いのですが、勿論此の他に適當なものとはどんなに扱つて、こどもの心を豊かならしめ、潤ひあらしめたいと存じます。先づ保育案に従つて大體みて参ります。

「西瓜と鼠」八百屋のお店に竝んであるお野菜が、毎晩鼠に悪戯をされるので困つてゐました。そこでお野菜達はいろ／＼相談した結果、西瓜に懲らしめてもらふ様頼みます。西瓜は其の晩鼠の虚をつき、その大きな重い體を利用してうまく懲らしたといふお話であります。結局、悪い事をした爲に懲らしめられたといふのでせうが、それよりも、此の、場面を八百屋に、登場人物をお野菜に、といふ點に注意したいと思ひます。其の爲に單純ではあります、極めてユーモラスに、然も自然に筋の運ぶ點がこども達に迎へられるのだと思ひます。尤も、西瓜がごろ／＼と轉つて、鼠のしつぽをきゆつとふんまへるといふ所は、それはもうたまらなく愉快らしく、歡聲を擧げるのですけれど、話中に出て来る野菜は、胡瓜、茄子、トマト、すいき、ちやがいも、さつま